

# Nara Women's University

「男らしさ」はどう描かれているか: ジョルジュ・サンド『アンディヤナ』を題材に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学文学部外国文学研究会 公開日: 2010-08-19 キーワード (Ja): アンディヤナ, ジェンダー, ジョルジュ・サンド, 男らしさ キーワード (En): George Sand, Indiana 作成者: 高岡, 尚子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10935/2026">http://hdl.handle.net/10935/2026</a>

## 「男らしさ」はどう描かれているか

— ジョルジュ・サンド『アンディヤナ』を題材に —

### 高岡尚子

19世紀ヨーロッパにおける女性存在のカテゴリ化について、テーヴェライトは次のように指摘する。

ヨーロッパのブルジョアジーの権力伸張（ドイツでは貴族と結託して行なわれた）は自由な生産可能性の制限と結びついていたが、この制限はふたたび特別なやり方で女性の身体という領土を使用して行なわれた。その主な特色は、十八世紀末における女性の公開に対して、女性の秘匿が制度化されたことにある。政治的ならびに美的なユートピアと女性の身体を結びつけることが、いかに深く男性の感情に根ざし、いかに効果的に行なわれたかがここで明らかになる。敗北し、幻滅した男たちは、かつて自由を約束するかに見えた女性の身体のコードに固執し、このコードに対して復讐を始めたのである。<sup>1)</sup>

ここで注目すべきは次の3点であろう。ブルジョワ権力の拡大と女性身体との密着した関係性、19世紀的特徴としての「女性の秘匿」、および女性身体のコッド化への「固着」とそのコードに対する「復讐」という、アンビヴァレントとも言える反応である。テーヴェライトはまた、男性側からの女性認識について「19世紀が経過する中で、エロチックな女性は男をむさぼるデーモンと化した。女たちはまるで、泉や河や遠くへ流れる海への約束をしなが

ら欺いた張本人であるかのように、いまや溺れさせられ、ロマン派とそれ以降の文学の中を水に浮く死体となって流れてゆく<sup>2)</sup>と述べるが、単に「デーモンと化した」だけでなく、そこには言いようのない憧憬が同居し、結果として「欲望の対象であると同時に怖れの対象であり、魅力あるものであると同時に危険なものであった」<sup>3)</sup>と考える方が妥当であろう。

19世紀を特徴付ける事象として、男女両性の強い分別とジェンダー規範の固着化があり、結果としてこの時代が「徹頭徹尾男性の世紀」<sup>4)</sup>となったことは、小説作品の中からもさまざまに読み取ることができる。その際、男性作家の筆による女性表象の「コード化」がどのようになされたかは、すでに別の機会に詳述したのでここではふれないが、<sup>5)</sup>女性たちはみな、男性視線による類型化を免れることができなかったのである。

これほどまでにコード化やカテゴリ化に熱心であった世紀であれば、女性表象のみならず、男性表象にも同様のことが起こっていたのであろうか。「男／女」という対概念として提示される二項対立が、実は、きわめて非対称的であることはすでに自明とされることも多いが、小説作品内において両性がどのように描かれているかといったことに関する研究についても、同じような指摘ができる。つまり、女性像に関する観察や研究、分析、論述が繰り返し生産されるのに対し、男性像についてのそれは極端に少ないと言ってよく、これもまた「非対称性」を裏付ける一要素とみなすこともできよう。だが、そのことは、小説作品において、男性性について語る場面が欠落していることを意味しないし、男性の身体に関する描写が存在しないわけもなく、加えて言えば、男性像には男性ジェンダーに特有の表象形態が存在し、類型化もされてきたのである。では、男性像とそれを支える「男らしさ」はどのように認識され、表現されてきたのか。19世紀前半のフランスの様相について、ジョルジュ・サンドの作品を用いながら、以下に検討してみたい。

## 1. 「男らしさ」への関心：管理と規準

『現代のエスプリ』446号の特集は「マスキュリニティ／男性性の歴史」と銘打たれ、その中で編者の小玉亮子は、座談会の口火を切って「歴史を見ることの意義、歴史から見えてくるものの意味を考えながら、マスキュリニティ／男性性というものが、社会の中でどう作られてきたかに焦点を当てたい」と述べる。<sup>6)</sup> このような見通しを持ちながら編集された本号には、日本、ドイツ、イタリア、アメリカなどさまざまな地域と時代を対象とした論考が収められ、男性性史研究の現状を幅広く俯瞰できる内容になっている。1970年代以降、フェミニズム理論の深まりの中で提案された女性性への振り返りと、その後のジェンダー的枠組みからの男性／女性関係への問い直しにより、女性性のあり方のみならず、男性性についての詳細な記述を求める動きが生じるようになった。『現代のエスプリ』のこの号は、その流れの上に立つもので、特に近代日本における男性性の成立過程と特徴を明らかにしようとしたものである。小玉は同じ座談会の中で「この分野で、日本でまとまった研究として刊行されたものの一つ」としてドイツの歴史学者トーマス・キューネの編著『男の歴史 市民社会とく男らしさ』の神話』（星乃治彦訳、柏書房、パルマケイア叢書8、1997年）を挙げているが、<sup>7)</sup> その後、ジョージ・L・モッセによる『男のイメージ—男性性の創造と近代社会』（細谷実・小玉亮子・海妻径子訳、作品社、2005年）の翻訳出版なども続く。また、日本における男性性に関する研究書としては、伊藤公雄による『男らしさのゆくえ—男性文化の文化社会学—』（新曜社、1993年）や、西川祐子・荻野美穂編『男性論』（人文書院、1999年）などがあるが、先に挙げたキューネとモッセの原著が共に1996年の刊行であることを考え合わせると、1990年代に入り、男性のあり方へのまなざしや、それを記述しようとする態度に大きな変化が生じてきたと言えるだろう。

本稿の分析対象であるフランスおよびフランス文学分野に関しても、状況

はほぼ同様である。人類学者や社会学者、精神医学者らによる男性性への新たな問いかけが1990年頃から急速に増加し、最近も、アラン・コルバンが序文を付した *Hommes et masculinités de 1789 à nos jours* や、アンヌ＝マリー・ソーンによる *« Sois un homme! » - la construction de la masculinité au XIX<sup>e</sup> siècle* などが出版されている。中でも、*Hommes et masculinités de 1789 à nos jours* (『男性と男性性 —1789年から現代まで—』) には、フランス革命から現代という歴史的視点をベースに、文学作品を含むさまざまな分野を横断する議論がふんだんに盛り込まれており、19世紀フランスにおける男性表象に関する検討という本論の目論見に大いに貢献してくれるだろう。

その中でもまず、男性の身体に対する関心がいつの時点に喚起され、その結果としての記述という行為がどのように始まったか、という点に注目しておきたい。ドベルパワーは「王政復古時代の刑務所世界と男性セクシュアリティ」の中で、次のように述べている。

19世紀の初頭は、フーコーが『監獄の誕生—監視と処罰』において詳細に検証した刑務所制度の誕生だけではなく、受刑者あるいは徒刑囚の肉体やセクシュアリティに関する記述が洗練を見始めた時期にもあたっている。それはおそらく、男性の身体を対象とした初めての制度的な言説であり、この身体は性ある肉体として扱われ、生殖やキリスト教的モラルという文脈を大きく飛び越えたものである。<sup>8)</sup>

ドベルパワーはこの論文の中で、社会制度として整備された刑務所という場において、男性の肉体がいかに管理され、記述されて一般の社会から隔離されていくかを詳細に分析する。そのことは言い換えれば、男性という性そのものが肉体という実体を伴った形で観察され、結果として分類や類型化の対象になったことを意味するだろう。生殖機能という視点や、モラルとし

てこうあるべきといった枠組みではなく、ただ「性ある肉体」としての男性身体への関心は、男性性の把握の仕組みにも少なからぬ影響を与えることになる。ドベルパワーは同時に、極度に単一性化された空間である刑務所は、法的、制度的な言説を多く生み出しただけでなく、「私的な文書、彫刻や絵画、演劇や小説」についても、新しい独特の表象形式を与えたとも指摘している。<sup>9)</sup> これは、男性の肉体への視線の変化が、小説のような表現空間にとっても無縁ではないということであろう。

肉体に関する詳細な記述はまた、「モデル」を生み出し、次には「規範」へとつながっていく。ドベルパワーが論じる受刑者や徒刑囚の肉体が、既存の社会制度に「反抗する身体」<sup>10)</sup> であり、その記述の目的のひとつが「管理」であったとするならば、一方の「従順な身体」、あるいは「賞揚される身体」とはどのようなものだったのか。これについては、モッセの『男のイメージ—男性性の創造と近代社会』が、かなり明確な示唆を与えてくれる。モッセは同書について、「西洋の伝統につらなる大陸部分、そして西欧の一部としてのドイツとオーストリアに議論の範囲を限定する」<sup>11)</sup> とあらかじめ断っているが、本論の対象であるフランスの近代に関する記述も少ないとは言えず、近代西欧が持つに至った男性イメージについての基本枠組を把握する目的での検討は有効であろう。<sup>12)</sup>

「意志の力、名誉、勇気」<sup>13)</sup> のような、現在にまで続く西欧的「男らしさ」の諸相がいつの頃から自明のものと受け入れられるようになったのか。モッセはそれについて次のように述べている。

近代的な男性性の理想が生まれ、近代の歴史の一部となった正確な時期を指し示すことはできない。一八世紀後半から一九世紀初頭の間のことかの時点で起こった、としか言えない。かつて近代男性性の各構成要素は存在していたが、それらが近代の始まりにおいて初めて組織

## 「男らしさ」はどう描かれているか

化され、ステレオタイプを形成した。そして、今や実際の人間の身体構造の重要性が、装飾品の重要性に勝ると言わないまでも、等しく重要なものとなった。男性性のステレオタイプは、男性の身体的自然の上に基盤を持った全体性として考えられたのである。<sup>14)</sup>

モッセの議論は、男性性がステレオタイプ化される過程とその重要性を中心に組み立てられており、こうした思考の流れ自体を近代性へと結びつけている。つまり、近代的な理想としての男性性は視覚化による承認によって初めて実現したものであり、また、その男性性は個別の何かを特徴とするものではなく、均質な類型という極端に没個性的なものだということである。もちろん、女性性に関する類型化も同様に実現されるのだが、その意味合いは同じではない。18世紀末から19世紀初頭というブルジョワ社会の形成期にあって、女性の性質が内的かつ私的領域として位置づけられるのに対し、男性性は外的かつ公的領域として、社会システムや政治的運動といった大きな枠組みと密接に結びついていくのである。そうであるなら、個々の男性の外見的あり方は、単に彼ら個人のものとは認識されない。男の見かけ＝男らしさは、普遍的な美を表象するものであると同時に、理想化された社会を象徴することになり、これもまた、女性の美が個人的なものであるのと対照をなすことになる。<sup>15)</sup>

可視化が求められ、それによって男性性の定義が行われたとするならば、根拠として何が用いられたのか。美の規準が執拗に探求され、いわゆる「人を見る目」を持った判定人たちが登場する。モッセはその代表的人物として、ヨハン・カスパー・ラファーター<sup>16)</sup>を挙げる。ラファーターは有名な著書『人相学についての論集』において、人間の性格が身体的特徴によって決定されることを説くことで、近代的な男性性の構築に大変な寄与をしたからである。ラファーターによれば、男性を身体的に向上させる美德とは「仕事へ

の愛、調和、清潔さ」であり、それが保たれることによって「身体的な健康と引き締まった四肢」が得られるのである。<sup>17)</sup> これこそは「近代的な男性性に伴う中産階級的な徳の定義」であり、ラファーターが讃えた「身体と道徳的な美の調和」は「理想的な男性のステレオタイプ」とぴったりと重なり、男性性の規準を定義づけるのである。<sup>18)</sup> そして、こうした内的徳目と外的美をつなぐものとしての肉体という認識は、さらに大きな枠組みへと敷衍され、「例えばフランス革命期に、革命の自己表象の一部として、男性の身体構造自体が健康的な国家および社会の象徴」<sup>19)</sup> になっていく。

## 2. 近代フランスにおける男性像：理想化と補強

フランスにおける近代的男性像の確立の過程とその特徴を明確にするには、社会の歴史的変遷への目配りが欠かせない。18世紀後半から19世紀という西欧近代の確立期は、フランスでは王政から大革命を経て帝政、復古王政、七月王政へという、激動の時期にあたっており、こうした変転がそのまま象徴としての「国家像」に連なる「男性性」に、影響を及ぼさないはずがない。ジュディス・シュルクスが述べるように、「男性性は、社会的、政治的アイデンティティに関する構成要素のひとつであるため、それをどのように定義付け、擁護するかということが、フランス史における重大事件の中では非常に重要な役割を果たした」<sup>20)</sup> のである。シュルクスは「フランス史における重大事件」を« Révolution »で始める。これによって生まれた新たな人間像を、モッセは「新しい象徴」としての「新しい男性」と呼び、<sup>21)</sup> シュルクスはこのようなモデルが« un citoyen nouveau, homme actif, producteur et génératif a détrôné un roi impuissant »（「新しい市民、行動的で創造的で生殖力のある男が、不能の王から位を剥奪した」<sup>22)</sup>）時に完成したと指摘する。ここで重要なのは、革命を経験する前と後とでは全く異なったタイプの男性像が作り上げられ、理想として掲げられたということである。その新しい像は、現代に

までつながるいわゆる「男らしい男」の一典型である、能動的で力のある肉体派、「大衆的ヘラクレスモデル」<sup>23)</sup>であり、力を持って困難を生き抜く存在の賞揚へとつながることは、革命という出来事の性質上、当然であるとも言えるだろう。このような傾向は革命後の混乱期を経て、ナポレオン帝政の終焉まで続いていく。言い換えれば、次の段階への転換の契機は、ナポレオンの失脚なのである。

帝政時代に培われ、育まれた「強い男性像」が瓦解した1815年以降のフランスでは、新たな男性性モデルが求められ、徐々にその姿をあらわしていく。しかし、それはもちろん、一朝一夕に成ったものではない。腕力にものを言わせることで生き延びた世代から、ブルジョワ的処世術を駆使することで社会の階段を昇っていく世代へ。この時代から時代への受け渡しは過渡期を経てのことであって、特に、ナポレオン失脚の前後に青年期を迎えた人々にはかなりの混乱があったと考えられ、「帝政期のヒーローたちの世代がいなくなると、ある種の青年たちのジェンダー形成に混乱が生じた。彼らは、現代では『世紀病 (mal du siècle)』と呼ぶものに襲われていた」<sup>24)</sup>のである。だが、影響の大きさは、「世紀病」にとりつかれ、メランコリーの発作に悩んだ特定の若者たちにとってより、むしろ、それ以外の人々にとっての方が、一層深刻だったと言えるかもしれない。なぜなら、彼ら一般の男性たちは、価値観の大転換を求められ、それに順応していかがるを得なかったからである。この時代の男性の弱さについて検討した論文の中で、デボラ・ギュテルマンはこのように述べる。

帝政の消滅は、若者たちから戦う兵士の「美しい死」という展望を奪い、新しい名誉の概念を承認したのだが、そこでは私的な空間での性的能力の強さを証明することが一大関心事となった。<sup>25)</sup>

ここに至って、兵士としての貢献が名誉となりえた時代が終わり、プライベートな空間における性的能力があることの証明が求められるようになった。つまり、ブルジョワ倫理を根底から支える「家族の中の父親という地位 (statut de père de famille)<sup>26)</sup>」に同化することが求められ、それが男性たちにとって、自己の存在証明となっていくのである。

このような変化の方向性をまとめて表現するなら、「腕力」から「弁力」とでも言えるだろうか。アンヌ＝マリー・ソーンは《*Sois un homme!*》 - *la construction de la masculinité au XIX<sup>e</sup> siècle* (『「男らしく！」—19世紀における男性性の構築—』) の第9章において、男性性の大きな変化の流れを「攻撃的な男性性からコントロールされた男性性へ」ととらえ、その特徴を「暴力の後退と喧嘩の拒否」に見出だしている。<sup>27)</sup> 美德としての「勇気と名誉」と、その表出である「暴力 (腕力)」という構図は次第に効力を失い、いつの間にか、表出しないこと (腕力に頼らないこと) が優勢を示すようになる。力にものを言わせるものはむしろ、洗練されない乱暴者として嫌悪され、かわりに、弁舌さわやかに他の信任を得るものが好まれるようになる。ソーンの言うように、この変化が達成されるためにはおよそ半世紀以上を必要とするし、すべての地域のすべての青年らが同じ時期にこうした波に遭遇したわけではない。<sup>28)</sup> だが、着実に起こる地殻変動は、男性のあり方に大きな打撃を与えたに違いないのである。

さらにもう一点ここで指摘しておく必要があるのは、男性性の理想が激しく変動しながらも規範として機能し続け、検証されながらも常に補強されていったという事実である。この「規範としての男性性」の正当化にはもちろん、対照としての「女性性」が必要とされたことは明らかである。女性の規範が厳しく定められ、固定されればされるほど、男性性の有利は確定し、地位の磐石に役立つのである。が、一方、男性同士の間であっても格付けや序列、あるいは理想に達する優秀者と落ちこぼれていく劣等者の分別があった

## 「男らしさ」はどう描かれているか

ことは容易に想像がつく。男性性はまず、絶対的他者としての女性によってその存在意義をア・プリオリに承認されるが、次にはまた、男性同士の間での優劣の競い合いがあり、その結果によって彼らそれぞれの社会的立場が決定されていくのである。ソーンはこの状況を次のように説明する。

男としての立場を守るために、ひとりひとりが命を懸けなければならないような社会では、思春期の頃からすでに、少年たちの間に不平等が生じ、その亀裂は深まっていく。1860年代までは、男性には二つのタイプがあって、特に庶民階級では、互いが文字通り対立していた。支配する行動者としての男性と、支配される受動者として男性という分別である。<sup>20)</sup>

支配者としての男性の間にも、支配と被支配の関係が生じる。そこには当然、あるべき姿としての男らしさという強迫観念が生じ、絶えず試され、承認され、また試されるという繰り返しの過程が存在したのであろう。さらに言えば、男性が男性としての承認を得るために女性を必要としたように、男らしさが承認を得るためには、「男らしくない男」を必要としたとも考えられるのである。こうした男性の存在を、モッセは「対抗的タイプ」と名付け、「この男性性の理想は、と言うより実は全体としての近代社会そのものは、自らをそれによって対峙させて定義しようのようなイメージを必要とした」<sup>30)</sup>と説明するが、言い方を変えれば、そうした周縁にはみ出した男たちの存在が、<sup>31)</sup>美しい理想の男性像を支えていたということになる。これもまた「男性性」を確定し、規準化するための重要なプロセスであり、それによって確実に、揺れ動きながらも男性性規範が補強され、受け継がれていくのである。

### 3. ジョルジュ・サンド『アンディヤナ』における男性の3タイプ：

#### 父との関係から

ここからは、現代の研究をふまえながら、19世紀当時の文学作品の中に「男性性」がどのように表象されていたかを検討していきたいのだが、本稿では主に、19世紀フランスの女性作家ジョルジュ・サンドが、その筆名で初めて書いた作品『アンディヤナ』（1832）を題材にする。男性性の表象の特徴を探るうえでこの作品を扱うのには、特に次の二つの理由がある。ひとつは、当時の世代的変遷を典型的に表現する男性人物3名を登場させている点である。ナポレオン時代の代表としてのデルマール大佐、革命期を生き延びた貴族の末裔であり、王政を讃えながら時代の寵児となるレイモン・ド・ラミエール、さらには、共和主義者のロドルフ（ラルフ）・ブラウンの3名には、19世紀初頭に男性が持たされたジェンダー規範への抵抗・対応・逡巡が非常に明快かつ典型的に表れていると思われる。もうひとつの理由は、この作品が、女性作家による女性の権利擁護のための、ある種のマニフェストとしての意義を持ち、実際に、多くの研究者や批評家によってそのように認識されてきたという点にある。ジョルジュ・サンドは、主人たる夫の奴隷としての身分を生きねばならない妻アンディヤナを女性からの告発として描き切ったことにより、一躍人気作家の仲間入りを果たした。しかし、サンドは単にフェミニズム的作品を多く残した作家という点から分析されるだけでなく、彼女が残した男性人物の描き方をさらに詳細に検討するなら、男性性の表象としても重要な成果が得られるに違いない。なぜなら、作家サンドは、当時のジェンダー構造・意識・役割などに対し、他の作家に比べればより複雑な意識を寄せていたと思われるからである。シュルキスが指摘するように「男性性の歴史を作り上げるためには、同時に女性性の構築がどのようになされたかを考えずにすまずわけにはいかない」<sup>32)</sup> のであれば、『アンディヤナ』は格好の材料と考えられる。

『アンディヤナ』は七月王政期の1832年に発表された作品であるが、その舞台は、復古王政の末期である。それはつまり、1815年のナポレオン失脚からはすでにかかりの時が過ぎ、ルイ＝フィリップの即位によって象徴的に示されるブルジョワ社会の確立が目前になった時期、ということの意味している。この、過渡期の時代に配置された世代の異なる3人の男性登場人物は、それぞれ何を背負い、何を表象することになるのか。男性性について迫られた変更という側面から考察する時、たとえばギュテルマンはその過渡性を、父と息子の断絶として説明する。「法と剣の所有者であった父親」と「1815年以降のフランスに生まれ、戦争とは別の手段で〈男〉にならねばならなかった息子」の間の断絶には、<sup>33)</sup> 従来型の理想的男性像が継承され得ないという困難と共に、新たに生まれるべき男性性モデルの模索という義務も含み込まれている。

ロマン派の作品の中には、特に1820年代以降、ナポレオンへのノスタルジーを強く表明するものがあるが、この懐旧の情は、皇帝という存在によって具現化された闘うヒーローがいまだに理想となりえることと、ヒロイックな行為を嫌う〈家庭の〉ブルジョワ的理想への迎合が必然的にもたらす困難を、同時に示しているのである。<sup>34)</sup>

この構図を「父と息子」の関係で捉えるなら、ナポレオン時代の理想を生き「父親」と、彼らから生まれ、ヒーローへの憧れと侮蔑という二律背反がもたらす困難を体験する「息子」たち、ということになるだろうか。

『アンディヤナ』はロマン派風の作品のひとつであるが、ナポレオンへの思慕が直接的に描かれることはない。むしろ、その時代やあり方への評価が批判的に語られるのであるが、それは、退役軍人であり、主人公アンディヤナにとっての暴君であるデルマール大佐の造形を通して明らかになる。「退役軍人」« ancien militaire » であり「年老いた勇者」« vieille bravoure » と

紹介されるデルマールに付された形容詞は、「ancien」も「vieille」も共に「古い・かつての」のニュアンスを持ち、<sup>35)</sup>すでに時代遅れの雰囲気を漂わせている。時がたっても「軍隊式パレードに慣れた士官に典型的な、あの絶えざる自己満足」(p.50)を身体から発散してはいるが、その美しさは「過去のもの」(p.49)であって、肉体の衰えは隠せない。今では「太り、額は禿げ、口ひげは白くなってしまった」(p.49)彼は「リューマチに悩んでいる」(p.50)のである。この、今でも威信を保とうとする態度と、内心に反して弱っていく身体はまさに、全盛を誇った過去にいかにかがみつこうとも再興を果たすことができない世代の様相を、比喩的に表現していると考えられる。デルマールにしばしば与えられる「勇者」« vieille bravoure » (p.49), « bravoure militaire » (p.133)という美德は、1815年以前に賞揚されたものではあるが、復興王政時代にあってはすでに時代の要請に合致しない。彼は「決して邪悪な人間なのではない」(p.271)のだが、「機知も才如なさも教育もない」(p.132)のために、得意の剣や拳に頼る外の術を持たない。「1815年以降、一步たりとも進んでいない」(p.168)デルマールはゆえに、「60歳の子ども」(p.86)と認識され、いわゆる「父親世代」の価値観の見事な体现であるのだが、同時に、「息子たち」に取って代わられる存在として提示されているのである。

では、「息子たち」世代にあたるレイモンとラルフはどのように提示されているのだろうか。ほぼ同年代に属する二人の人物設定に共通するのは、実際にも比喩的にも父親と断絶あるいは別離している点である。そのことは、彼らが父親の支配からの脱却と、新たな価値観の担い手という役割を与えられていると想像させるのに充分であり、実際にその通りなのであるが、彼らがどのように他人から扱われ、また自身を作り上げていくかという点においては、正反対のサンプルとして機能している。そのことは彼らの政治信条の違いに明確に表れているが、ここでもうひとつ確認しておく必要があるのは、作家自身が信頼を寄せる人間観を、どちらの人物により強く反映させている

かということである。その点を知るにあたっては、作品の前半部に置かれた  
« je » 「私」による人物評が参考になる。<sup>36)</sup>

私は個人的に、ひとりの男の政治的信条は、その男の全てを表すもの  
と考えている。(…)

ラルフとレイモンはあらゆる点において異なっていた。(…)レイ  
モンはどのような場面においても現行の社会における勝者であって、ラル  
フは彼の利益を支える土台をあらゆる点において攻撃するのだった。

それはまったく簡単なことであって、レイモンがいつも幸福であり、  
他人から常に完璧な取り扱いを受けていたのに対し、ラルフは人生にお  
いて不幸と嫌悪感しか経験していなかったのである。かたや全てを素晴  
らしいと思い、一方はあらゆることに不満だったというわけである。(…)

ラルフはそれゆえ、いつも共和制の夢を主張し続け、あらゆる弊害、  
偏見、不正を正したいと願っており、その計画はすべて、新しい種類の  
人間の創造への期待の上に成り立っているのであった。レイモンは世襲  
の王制を支持し、彼の言うには、弊害や偏見や不正を忍ぶほうが、断頭  
台で無実の血が流れるのを見るよりはよほどましなのであった。

(pp.166-167)

後のサンドの政治姿勢や活動とその一貫性を考えれば、彼ら二人のうちど  
ちらにより深い親近感が投影されているかについては、議論の余地がない。  
しかしそのことと、彼らが社会的にどのように遇されるかとは、話の次元が  
異なる問題として提示されているのがわかる。なぜなら、「新しい種類の人  
間の創造」という共和的理想主義を掲げるラルフは社会から徹底して冷遇  
され、自分にとっての現世的優位をいち早く見極め、その他の人間にとつ  
ての不幸に関心を払わないレイモンは、逆に社会の寵愛を受け続けるからである。

このような二人の造形から浮かび上がる、新しい世代の男性性とはどのようなものなのか。ここで前提として、彼ら二人の父親（および母親）との関係を明らかにしておきたい。まず、作品の開始時点において、レイモンには父親がいない。彼の肉親として登場するのは「波乱万丈の悲しみに満ちた生涯を送り、もはやただ一つの宝であり、希望である息子しか生きる目的がない」（p.127）と、レイモンが考える母親のみである。彼には父親からの直接的なしがらみはないが、父親が残した名前と財産を意のままにする自由がある。その点からすれば、彼は父親世代の遺産を検討も了承も、否定もすることなく引き継ぐ存在と言えるだろう。無批判、無自覚なまま受け取られたものはたやすく彼の血肉にはならず、社交上の試練をいくつか受けることにはなるが、その際の困難は母親が片付ける。レイモンによる母親の描写は、革命の混乱期に苦勞をした身体の弱い女性、というものであるが、実際に息子の生活を物質的にも精神的にも管理し、支えているのは彼女の方であり、レイモンにとっての母親は、何か困難にぶつかったときの逃げ場所であり、言い訳に利用されることが多いのである。息子レイモンと親世代との関わりの特徴は、ここにすでに明らかであろう。レイモンは父から、自分にとって都合のよいものだけを受け継ぐ者と設定されているのである。中でも、母親の存在は大きいと言えるだろう。意図するかしないかは別として、結果的に、葛藤も衝突もなく父親から母を奪い取った息子というのがレイモンの表象であるとするなら、このような息子における男性性とはいかなるものとして描かれるか、検討の余地があるだろう。

次にラルフであるが、彼の場合には肉親が、アンディヤナを含めて数多く描かれてはいる。その点、家族関係におけるラルフの位置は、レイモンとは比べ物にならないくらいに複雑である。父と母の息子として、両親に溺愛される兄の弟として、婚約者の死によって無理やりその弟と結婚せざるを得なくなった妻の夫として、生後間もなく亡くなる赤ん坊の父親として、また、

影のように従妹を支えるアンディヤナの従兄として、ラルフは作品に存在している。しかし、彼は常に相手との相対的關係によって定義される存在であって、彼自身が主体的に誰かにとっての何者かになることが一切ない。兄のようになれない弟として両親から憎まれた彼は、「自分自身に対して嫌悪感を持つように育てられ、その結果、人生に絶望した彼は15歳の時には憂鬱の発作に襲われた」(p.157)というのが、彼の青春期の要約である。つまり、彼には父も母もいたが、積極的に嫌われ、断絶させられたという経験がある点において「鬼子」の系譜に連なるのである。それは言い換えれば、彼は親の世代からは何も受け取らず、「あまりにも孤独に生きていたので」その結果、「自分自身を知ることを選び」「自分自身の心の友となった」(p.177)、ある意味完全な自立／自律の存在だと言えるだろう。このような、陰惨な子供時代を送った青年が、閉じた個性としての自身をどのように開き、新しい「人間モデル」としての男性像を示しうるのかを以下に検討し、『アンディヤナ』における男性性の分析としたい。

#### 4. 理想的男性像の断絶と再生？

『アンディヤナ』に描かれる3人の男性像を比較してみる時、デルマールが体現する旧来型の男性性に未来が託されていないことは明らかであろう。「年齢と疲労のためにあまりにも弱っていたため、もはや父親になりたいと思ってもかなわず、家庭の中で老いた独り者の状態であり続けた」(p.271)という描写からは、次の世代に引き継ぐべきと期待されるものが何もなく、ある意味 « *impuissant* » 「不能」の状態だと言うこともできる。では、レイモンとラルフはどうか。すでに述べたとおり、サンドの政治信条からすれば、ラルフに強い親近感があり、彼に将来の可能性のほとんどが託されているのは明らかであろう。しかし、レイモンの存在は一概に否定されているものとも言えず、逆に、七月王政以降の男性が持っていてしかるべきと思われる処

世能力が付されているとも考えられる。その能力をサンドがどのように評価するかは別として、当時の多くの青年たちに称賛され、新しい価値観として認められていたのは確かであろう。

デルマールは事業に失敗し、ラルフとアンディヤナを伴って、彼らが育ったブルボン島へと出発する。時を同じくして、レイモンは病を得たうえ母を失ったため、弱った心からアンディヤナを求める手紙を書く。手紙を受け取ったアンディヤナは、こちらにも病に倒れて瀕死のデルマールをラルフの元に残し、レイモンを救うためにフランスへ戻る。だが、勇んで戻ったレイモンの傍らにはド・ラミエール夫人（レイモンの妻・ナンジー嬢）がいた、というのがアンディヤナとその誘惑者レイモンとの関係の終焉である。この後、アンディヤナを迎えに来たラルフは、悲しみの人生を終わらせるため、心の奥底で愛し続けた従妹に対し、懐かしいブルボン島で滝に飛び込むことを申し出る。結果的に、この自殺の試みは失敗し、二人は山奥で奴隷の解放を助けながらひっそりと暮らすという結末が用意されているのだが、ここで注目しておきたいのは、レイモンとアンディヤナの関係が完全に清算される時期ときっかけである。レイモンの病・母の死・デルマールの死・アンディヤナの出奔という4つの出来事はこの順に起こるのだが、時間的にはほとんど差がなく、アンディヤナが再度フランスの地を踏む時期ははっきりと七月革命時に設定されている。史的事象が物語の中にはっきりと姿をあらわすのはこの時だけであるため、その印象の強さは格別なのだが、それがブルジョワ覇権へのターニングポイントとびったり重なっているのは偶然ではないだろう。レイモンの母とデルマールの死は、前時代の貴族的意識と軍人意識の消滅を意味するだろうし、レイモン自身の病とそこからの生還は、新しい時代に順応する彼の再生を表すことになるだろう。

では、レイモンは何を選び、どのように再生するのか。彼には弱さも欠点もあったが、復古王政期に青年期を迎えた彼は「周囲の人間に対して信じが

たいほどの影響力 (« *incroyable puissance* ») (p.128) を持ち、「社交界の勝者」(p.166)として君臨していた。その源泉にあったものの本質とは、「政治的情熱がない人間」(p.129)であるにもかかわらず、その手になる政治パンフレットが熱狂を持って読みふけられた (p.128) ことが語るように、また、アンディヤナとの恋愛事件における振る舞いが、「彼の言葉には本当に力があり (« *puissant dans son langage* »)、演技は本物だった。この熱に浮かされた男は、恋愛を快樂の技術と考えていた。そして自分でも錯覚を起こすほど真に迫って情熱を演じていたのである」(p.220)と記されるように、本当はない物があるように示す「言葉の力」であり「演じる力」だったのである。こうした姿は、ある意味偽善的であると言えようが、作家は彼を形容するとき、執拗に « *puissant* » や « *puissance* » という表現を用いる。これはデルマールが « *impuissant* » 「不能」であるのと対をなし、次の時代への生き残りを暗示することになろう。実際に、復古王政の転覆 (= 彼自身の病) を経た後も、彼は見事に再生する。そして、そのよみがえりのきっかけとなるのは、結婚である。

身体が癒えたら結婚しようと彼は決心した。それで彼は頭の中で、社交界を構成する二つの階級のサロンで自分を惹き付けた顔や名前をいくつか思い出してみた。(…) どう見ても、この階級がもう一つの階級の残骸の上に立ちはだかることは確実だった。そして、時代の流れの表面にあり続けるためには、工業資本家か投機家の娘婿にならねばならなかった。(pp.263-264)

社交界を構成する二つの階級とは、彼が元々属している貴族階級とブルジョワ階級のことであり、復古王政の瓦解の結果、ブルジョワの方に覇権が移ったのは明らかである。つまり彼がここで選んでいるのは、消滅してゆく自ら

の出自に拘泥することなく、新たな時代の表層に浮かんでいるための手段、すなわち、資本家の金を運んでくれる娘との結婚と、それによって可能になる家庭の中の父というあり方なのである。言葉と演技の力によって社会に君臨した男の、時代に逆らわないことを目指して採った方策の落とし処は、ここなのである。

ラルフは、レイモンとは全く逆の経過をたどることになる。活発で誰からも愛された兄とは反対に、「不器用で、憂鬱で、ほとんど自分を外に出さなかった」(p.157)ラルフは、それゆえに家族の中で孤立し、他人とのかかわりを持たないために「エゴイスト」として扱われ続ける。結婚はするが、兄から引き継いだ婚約者は彼のことは愛さず、生まれた息子も直ちに亡くなる。レイモンが逆に言葉によって自らを演ずる力によって「puissant」であったとするなら、彼は内向し、他との関わりを築けないことによって「impuissant」であると言えるだろうし、実際に彼はそのことを自覚している。

自然は私に、自分の感情をまなざしや言葉で伝える力を与えなかった。それが私をエゴイストにしたのだ。他人は精神的な人間を、その表面だけで判断し、だから私は熟れない果実のように、脱ぎ捨てることのできない皮の内側で干乾びるしかなかったのだ。(p.315)

「熟れない果実」« fruit sterile »という表現には当然、「impuissance」[不能]の意の含みがあり、このままの彼であれば、次の時代へと何かを引き継ぐ存在にはなり得ない。が、その様子は、事実上レイモンに遺棄された形のアンディヤナを拾い上げ、ブルボン島へと帰る旅路にあって、劇的な変化をとげていく。彼は初めて自らの経験と感情を語り、アンディヤナへの愛を告白する。アンディヤナもまた、それまでは内向的なエゴイストとみなしていた従兄の真実に触れ、彼への信頼の種類を変えていく。これは、雄弁と

外見のレイモンには真実がなく、外部からの束縛によって麻痺させられていたラルフに確固とした核が存在することへの気づきでもあると言えるだろう。ただし、この劇的な変身を支えるのは自殺の覚悟であり、その点において、ラルフは変わらず « impuissant » なのである。

作品の本編は、アンディヤナとラルフが滝に飛び込む場面に終わるが、この後には「結論」と題された部分が用意されており、ここで二人はブルボン島の山奥で、奴隷を解放するための活動をして生活している。この「結論」だけに焦点を当てれば、ラルフはその共和主義的信条を実生活に反映させ、理想のコミュニティを実現しているかに見え、そのことはまた、次の時代を切り開くことのできる新しい男性性を提示しているようにも理解されるだろう。しかしここにもまた保留があり、そのことは、ラルフが「結論」部分の聞き手に向かって与える最後の助言が明らかにする。「いつの日か、社会があなたを中傷し、排除するようなことがあったらそのときは、社会がなくても生きていけるというくらいの自尊心をお持ちなさい」(p.343)という言葉にはもちろん、ラルフの強烈な自我意識がにじみ出ているが、同時に、社会と縁を切らねば理想を現実へとシフトできない自身の限界への認識を読み取ることもできるだろう。

レイモンとラルフという二人の人物造形には、次の時代を理想的な形でリードしていく男性像が明確に示されているとは言えない。作家サンドにとって、レイモンの世渡りを実践する男性はそれなりに一つの典型をなしはするが、決して望ましいあり方ではない。とは言え、ラルフのそれもまだ熟成を見ているわけでは決していない。作家としてのキャリアをスタートさせた1832年という時期に、サンドの中に存在した男性像がタイプ化されてデルマール、レイモン、ラルフという形をとり、ある種の迷いを含みながら表現されると言える。そしてそのことは、作品に描かれる女性像もまた、十全たる開花に至らぬ状況で提示されていることにも反映している。結婚という社会的

## 「男らしさ」はどう描かれているか

束縛に抵抗しようとしたアンディヤナは、レイモンに拒絶されることによって試みを打ち碎かれる。ラルフは彼女を救いはするが、彼らの居場所は一般の社会の中になく、彼女は相変わらず主人としての男性に依存せずには生きていけない。レイモンの妻となるナンジー嬢は、結婚によって可能になる女性の人生を受け入れてはいるが、そこにはアンディヤナとは異なる種類の諦念が渦巻いている。そうでなければ社会の中で生きてはいけないという意味においては、アンディヤナもナンジー嬢も全く同列なのであって、独立した彼女ら自身の人生の選択という観点からは、障害はまだ山積みであり、その越え方のモデルも提示されているとは言えない。

すでに述べたように、女性の類型化には男性の類型化が反映しており、「男性性の歴史」を記述するためには「女性性の歴史」を相互に参照する必要があるという事実をふまえるなら、『アンディヤナ』全編を通じて漂う不安定さは男女双方の造形に影響し、時代の気分を表現してしまっていると言ってよいかもしれない。その時代の気分は確かに、社会的変化に翻弄されるゆえであるとも言えるだろうが、こうした過渡期的状況を脱すれば、何か確固たる男性性・女性性のモデルが確立されるのだというわけでもない。むしろ、男女間の差異の認識とその固定化、および社会における役割のジェンダー化は、この後19世紀を通じてさらに厳密さを増し続け、その厳格化の流れそのものによってさまざまに揺れ動く「男性性」「女性性」が、枠組みをはみ出す形で表出したというのが現実である。もちろん、作家たちがそのことに敏感でなかったわけがない。ブルジョワ社会がますますその固定化を推し進める中で、「何らかの点において病気が男らしくないと見なされたがゆえに、男らしさの理想にそって成長することができなかった中産階級の男性」<sup>37)</sup>たちが、七月王政以降に執筆された作品に多く描かれることになろう。本稿で扱った『アンディヤナ』におけるレイモンやラルフはその一端であるとも言えるが、ジョルジュ・サンドの作品には、これ以降、特に1840年代にかけ

てさらに複雑な男性像が描かれることになる。その造形の類型化と分析については、今後の検討課題としたい。

- 
- 1) クラウス・テーヴェライト『男たちの妄想Ⅰ 女・流れ・身体・歴史』、田村和彦訳、法政大学出版会、1999年、p.530.
  - 2) 同上、p.531.
  - 3) 小倉孝誠『<女らしさ>はどう作られたのか』、法蔵館、1999年、p.11.
  - 4) テーヴェライト、前掲書、p.490.
  - 5) 拙論集『19世紀フランス小説における女性とセクシュアリティと子供像』（平成18年～20年度科学研究補助金 研究課題番号18520205 成果報告書）の第2章『『母親たち』の側から—19世紀フランス小説に描かれた母と女のセクシュアリティ—』を参照されたい。
  - 6) 座談会「マスキュリニティ／男性性を歴史的に考えるということ」（加納実紀代・星乃治彦・細谷実・小玉亮子）、『現代のエスプリ』446号、至文堂、2004年9月、p.5.
  - 7) 同上、p.5.
  - 8) Nicholas D. Dobelbower, « Univers carcéral et sexualité masculine sous la Restauration », in *Hommes et masculinités de 1789 à nos jours*, Collection Mémoires / Histoire, Autrement, 2007, p.42. 以下、フランス語のテキストからの引用は拙訳による。
  - 9) *Ibid.*, p.42.
  - 10) *Ibid.*, p.52.
  - 11) ジョージ・L・モッセ『男のイメージ—男性性の創造と近代社会』、細谷実・小玉亮子・海妻径子訳、作品社、2005年、p.24.
  - 12) モッセはまた「この文脈において革命後のフランスについて論じること

は難しい。と言うのも、フランスには一般的な男性性のステレオタイプを扱った研究が、相対的に少ないからである」(同上, p.24)とも述べている。この記述からすれば、フランスにはフランスの独自性があるのだが、男性性に関する整理と分析という点では、遅れがあるとも読める。だが、本論で指摘するように、モッセの著述後、フランスでも同分野に関する研究が蓄積されているところでもあり、比較検討の対象も整いつつあると考えられる。

- 13) 同上, p.8.
- 14) 同上, p.10.
- 15) 「身体の構造と身体の美は重要性を増していった。そして、近代的な男性性は、徳を象徴化した男らしさの美の理想によって自己定義を行ったのであった」とモッセは指摘する(同上, p.11)。
- 16) 人相学の研究で名高いこの人物はスイス人で、Johann Caspar (Kasper) Lavater と綴る。彼の名の日本語表記については、「ラヴァター」、「ラヴァーター」、「ラヴァテール」などと一定しないが、ここではモッセの翻訳者にならって「ラヴァーター」を採用している。
- 17) モッセ, 前掲書, p. 41.
- 18) 同上, p.41.
- 19) 同上, p.43.
- 20) Judith Surkis, « Histoire des hommes et des masculinités : passé et avenir », introduction pour *Hommes et masculinités de 1789 à nos jours*, pp.16-17.
- 21) モッセ, 前掲書, p.11.
- 22) Judith Surkis, *op.cit.*, p.16.
- 23) Alain Corbin, préface pour *Hommes et masculinités de 1789 à nos jours*, p.9.
- 24) *Ibid.*, p.10.
- 25) Deborah Gutermann, « Le désir et l'entrave. L'impuissance dans la construction

de l'identité masculine romantique : première moitié du XIX<sup>e</sup> siècle », in *Hommes et masculinités de 1789 à nos jours*, p.55.

- 26) Judith Surkis, *op.cit.*, p.16.
- 27) Anne-Marie Sohn, « *Sois un homme!* » - la construction de la masculinité au XIX<sup>e</sup> siècle, Seuil, 2009, p.389.
- 28) *Ibid.*, p.389.
- 29) *Ibid.*, p.136.
- 30) モッセ, 前掲書, p.89.
- 31) モッセは周縁化された人々の例として, 定住の地を持たないジプシーや浮浪者, ユダヤ人, 規準からの逸脱者としての犯罪常習者, 精神異常者, 性的異常者などを挙げている (同上, p.90)。また, コルバンやシュルキスは, 性的不能者も対抗的タイプのひとつと捉えている (Alain Corbin, *op.cit.*, p.9 et Judith Surkis, *op.cit.*, p.16)。
- 32) Judith Surkis, *op.cit.*, p.18.
- 33) Deborah Gutermann, *op.cit.*, p.58.
- 34) *Ibid.*, p.58.
- 35) George Sand, *Indiana*, édition présentée par Béatrice Didier, Gallimard, Collection Folio, 1984, p.49. 以降, この作品に関しては, ページ数のみを記す。
- 36) 『アンディヤナ』は三人称の語りによる小説だが, とときふいに, « je » 「私」という一人称が登場し, 人物評や社会批評を始める。
- 37) モッセ, 前掲書, p.129.

本稿は、平成21年～23年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 21520330「19世紀フランス小説における男性へのまなざしとジェンダー構造」の研究成果の一部である。